「男と女はこんなに違う！」を受け入れるのは誰か (2)

男子大学生の両面価値的性差別態度とジェンダー自尊心に着目して

○倉矢 匠¹

(¹ 東洋大学大学院社会学研究科)

キーワード: ジェンダー常套句, 両面価値的性差別理論, ジェンダー自尊心

Male Students Who (Don't) Endorse Gender Clichés Exaggerating the Differences between Men and Women

Takumi KURAYA¹

(¹ Graduate School of Society, Toyo Univ)

Key Words: Gender Cliché, Ambivalent Sexism Theory, Gender Self-Esteem

目 的

世間には, 心理的側面における男女の違いを強調した常套句(以下, ジェンダー常套句)が数多く流布しているが, 「男女に心理的違いはほぼない」とするジェンダー類似モデルの知見 (e.g., Hyde, 2005) に従えば, 過剰に心理的性差の存在を主張した情報が社会に氾濫していると指摘できよう。

性差別的信念がジェンダー相違モデルの性差観を強化することを考慮すれば, 性差別的な態度や動機によって, ジェンダー相違モデルを反映した情報の取り入れが方略的になされる可能性も考えられる。なお, 両面価値的性差別理論 (Glick & Fiske, 1996) において性差別は, 敵意的性差別 (以下, HS) と慈愛的性差別 (以下, BS) の 2 種類に大別されるが, HS は主として競争的文脈, BS は相補的文脈で, それぞれ男女を二分化することに由来していると考えられる。さらに, 性別二分化に対する予測因としてはジェンダーアイデンティティの強さも指摘されている (Bosson & Michniewicz, 2013)。男性という社会集団の一員としてアイデンティティを内在化することは, 男性にとって社会的優位性の獲得を意味し, 現存システムの正当化を強めることにつながることも指摘できる。

上記を踏まえ, 本研究では, 男性の大学生を調査対象に, 世間に流布したジェンダー常套句を是認する程度を調査した。特に, 異性に対する文脈の異なる 2 種類の性差別的態度 (HS と BS) の強さと, 自らのジェンダーを受容する程度が, ジェンダー常套句を是認する程度をどのように予測するのかを検証することを主たる目的とした。

方 法

参加者 大学生の男性 123 名 ($M_{\text{age}} = 20.11$ 歳, $SD = 1.21$)

素材

ジェンダー常套句の是認度

「男女の違い」にまつわるフレーズ 18 個 (e.g., 「女は「共感」を求め, 男は「解決」を求める」) に対する是認度を 6 件法 (0~5) で求めた ($M = 2.79$, $SD = 0.91$, $\alpha = .85$)。

女性に対する両面価値的性差別主義態度

Ambivalent Sexism Inventory 日本語版 (宇井・山本, 2001) を用いた。HS と BS それぞれ 10 項目ずつに対し, 6 件法 (0~5) で回答を求めた ($M_{\text{HS}} = 2.30$, $SD_{\text{HS}} = 0.65$, $\alpha_{\text{HS}} = .83$; $M_{\text{BS}} = 2.23$, $SD_{\text{BS}} = 0.77$, $\alpha_{\text{BS}} = .87$)。

ジェンダー自尊心

回答者が自らのジェンダーを受容している程度の指標としてジェンダー自尊心 (Gender Self-Esteem; 以下, GSE) を測定した。Falomir-Pichastor (2009) の尺度を日本語に翻訳し, 「私は, 自分が男性であることをとても誇らしく思っている」など 3 項目に対し, 当てはまる程度について 7 件法 (0~6) で回答を求めた ($M = 3.82$, $SD = 1.45$, $\alpha = .94$)。

関連が予想されるその他の心理指標

ジェンダーシステム正当化信念 (Jost & Kay, 2005; 以下 GSJ) を測定する 8 項目 (9 件法: 0~8), 生物学的本質主義信念

(Brescoll et al., 2013) を測定する 7 項目 (9 件法: 0~8) をそれぞれ日本語に翻訳したものに対し, 回答を求めた (順に, $M = 3.88$, $SD = 1.04$, $\alpha = .70$; $M = 4.05$, $SD = 1.19$, $\alpha = .87$)。

手続き

上記 4 尺度が含まれた調査票に回答を求めた 1 ヶ月後, ジェンダー常套句に対する是認度について質問紙で回答を求めた。

結 果

ジェンダー常套句の是認度を目的変数とし, step1 で単独変数, step 2 で一次交互作用項を投入 (得点は事前には中心化) する階層的重回帰分析を実施した結果, HS ($\beta = .22$, $t = 2.53$, $p < .05$), GSE ($\beta = .38$, $t = 4.97$, $p < .001$), BE ($\beta = .28$, $t = 3.67$, $p < .001$) の正の効果と, step 2 の説明率 ($R^2 = .51$, $\Delta R^2 = .11$, $ps < .001$) および HS×BE ($\beta = .27$, $t = 2.89$, $p < .01$) の交互作用項, GSE×HS, GSE×BE, GSE×GSJ の交互作用項 ($-.22 < \beta s = -.18$, $-.227 < ts < -1.99$, $ps < .05$) の標準偏回帰係数が有意であった。単純傾斜検定の結果, GSE が低いと同時に HS や BE, GSJ が低い男性は, ジェンダー常套句を是認しないことが示された。

Figure 1. Relationships between Hostile Sexism toward Women and Gender Self-esteem, and Endorsement of Gender Clichés in Male Students (Simple Slope Analysis).

Note. $N = 123$; HS = Hostile Sexism toward Women; GSE = Gender Self-esteem

† $p < .10$. * $p < .05$. ** $p < .01$. *** $p < .001$.

考 察

本研究結果から, 自らが男であることに不満や負い目を感じている男性の中には, 社会的に構築された男性の役目に生きづらさを感じる者がおり, 彼らは男女の心理的違いを強調する常套句を否定することで, 今の男性役割の重圧から解放されたいと思っている可能性が示唆された。

主要引用文献

- 1) Bosson, J.K., & Michniewicz, K. S. (2013). *JSPSP*, 105, 425-442.
- 2) Glick, P., & Fiske, S. T. (1996). *JSPSP*, 70, 491-512.
- 3) Hyde, J. S. (2005). *American Psychologist*, 60, 581-592.
- 4) Falomir-Pichastor, J. M. & Mugny, G. (2009). *PSPB*, 35, 1233-1243.